

雪月風花

八坂凜

月の澄んだ、星の輝く夜だった。

透き通った空気を吸い込んで吐くと、白い煙になった。煙は、透明な風がさらっていった。吸い込んだ空気は、私の体を廻って、私のつま先から頭の先までを薄く冷やした。

どこまでも透明な、そんな夜だった。

そんな夜に、私はある女に会った。

「誰だ。」

私は尋ねた。

「私は花でございます。」

女は応えた。なるほど女は薄い花弁のように儂く美しかった。

「なんの花だね。」

女は曖昧に笑った。

「いろいろな花でございます。」

「なぜここにいいのかね。」

すると女は目蓋を切なそうに細めて、白い指先を私の頬に首に這わせた。女の吐息が、煙になった。

「あなたに会いに来ました。」

「私に。」

「ええ、あなたにです。」

すると女は、口元を両手で覆い、ああ、と息を吐いた。女が手をこすり合わせると、手に残っていた女の吐息が逃げて、また白い煙になった。

女は白かった。女の着物と、透明な空気にさらされた指先や頬だけが紅く色づいていた。

「もうすぐ、もうすぐです。」

女が、ぽつりと呟いた。

「雪が降ります。私は隠れるでしょう。」

「ああ。」

私は頷いた。女は長い睫を伏せた。

まもなく雪が降るだろう。雪は、透き通った空から降ってくる。雪が降れば、空気だけでなく、音も透明になる。

女は、紅い指先を彷徨わせた。白く長い指の先の紅はまるで、寒気の中に咲く梅のようだった。その梅が、私の胸元に辿り着くと、女は私の着物を弱々しく握りしめた。

指先の梅は、私の着物に隠れた。

女は震えていた。そして何も言わなかった。

「また会える。」

私は女の長い髪をなでた。女はまだ震えていた。

「私は隠れてしまいます。」

「また探すさ。」

短く応えた。女の長い髪をなで、肩をなで、背中をなでた。そうしているうちに、女の震えはようやく止まった。

女は睫を揺らして、目蓋を閉じた。そうしてそのまま、眠った。

雪が降った。

水を多く含んだ雪は、いくつもの結晶がまとまって降ってきて、小さな花束のようだった。花束は、先に降りた物から順に、女の上に、脇に積もった。

女の指先は、頬は、雪に染められた。

女が雪に隠れきったとき、私は踵を返して歩き始めた。

私は、女を探して歩き始めた。

私の足音は、雪が掬い取った。

その箱の中は暖かかった。そして、その箱はとてつもなく暗かった。箱の中にはいっぺんの光もささなかつた。光など、箱には必要のないものだった。

箱の中には、ひとりの少女が眠っていた。

少女は、自分が何者であるかを知らなかつた。考えるはずもなかつた。彼女は、箱に入れられたときからずっと眠っていたのだ。ゆえに、少女は箱の中で思考をしたことがなかつた。

そうして箱が少女のゆりかごになってから、どれほどの時間がたっただろうか。少女はやがてゆっくりとそのまぶたを開いた。

無論、箱は暗いままだった。少女はまぶたを開いても、何も見ることはなかつた。けれども少女は、何も見えない不安を感じることはなかつた。彼女にとって、はじめから暗闇だったから。

箱の中はゆらゆらと揺れて、心地よかった。少女はそこで眠っては起きて、眠っては起きてを繰り返した。

そのうち、少女はただ眠るだけの毎日に退屈を感じるようになった。すると、自分に、動かせる手足があることに気がついた。少女は足を思い切り伸ばしてみた。少女の足は伸ばしきる前に箱の壁に当たった。それ以来、少女は暇を感じるたびに腕を振り上げたり、足を蹴り上げたりしてみた。そのたびに箱の壁にぶつかるが、箱はやわらかく、少女が怪我をすることはなかつた。

しかし、狭い箱の中で手足を動かすことにも、やがて飽きてきた。少女は思考した。今までを思い返してみた。少女が好きだった花の咲く丘。春になると、色とりどりのに彩られ、どこを見ても飽きなかつた。少女はその丘のある町で生まれ、暮らしていた。そうしてその町で一人の男と出会い、その男と二人で暮らし、男が彼女を一人置いて去っていても、彼女はその町で暮らし、眠り続けた。

もう一度、あの町に行きたい。

少女は、初めて願望した。

ここを出て、あの町に行きたい。ここはどこかしら。

少女は、初めて疑問を持った。

しかし、少女がどれだけかつていた町にあこがれても、箱の出口は見えなかつた。箱の中は暗闇なのだ。

ここを出ることはできるのかしら。

少女は、初めて不安を感じた。

それでも少女はあきらめなかつた。腕をあげ、足を伸ばし、出口を探った。そしてようやく、小さな穴を見つけた。

出たい。ここから出たい。

少女が強く思えば思うほど、箱の穴が広がっていくような気がした。一方で、強く強く願うたび、頭がきしむように痛んだ。

出して。ここから出して。

頭が痛い。しかし少女が願えば願うほど、願望は叶えられていった。頭が割れるように痛み、

痛みの影響からか、箱から出たいという思い意外をすべて忘れてしまったが、少女は少しずつ光を感じ始めた。

やがて箱から出きったことを悟ったとき、少女は大きな叫び声を上げた。

光がまぶしすぎて、何も見えなかった。

しかし、箱のときのようにやわらかく、暖かいゆりかごに包まれたことを感じた。